



アジア人留学生・就学生の生活と文化変容(1)

浅野, 慎一

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 3(1):149-177

(Issue Date)

1995

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000208>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000208>



アジア人留学生・就学生の生活と文化変容（1）

浅 野 慎 一

— A Sociological Study on Asian Students in Japan: Their Life and Acculturation(part 1)—

Shinichi ASANO

序 章 課題と方法

本稿の課題は、日本に滞在するアジア人留学生・就学生の生活と文化変容の特質を明らかにすることにある。

1980年代以降、急増したアジア人留学生・就学生の学習—労働—生活実態については、特にその中で大きな位置を占める中国人のそれを中心として、多くの研究が蓄積されてきた。そこで描き出される留学生・就学生像は、大きく3つに整理しうる。

まず第1は、事実上の「出稼労働者」としての留学生・就学生である¹⁾。ここでは、留学生・就学生の中に、円高日本での金儲けを目的として、「留学」・「就学」の名を借りて来日した者が大きな位置を占めることが強調される。彼らは、その動機・資質・学力・経歴・指向性等の点で、高等教育機関での人材養成、及び、それを通じた国際交流といった「本来」の留学の趣旨から、大きく逸脱した存在とされる。そこで、こうした逸脱した「留学」・「就学」を大量に発生させる受入側・送出側双方の社会的諸条件が考察される。

第2は、基本的人権を侵害される被害者としての留学生・就学生である²⁾。ここでは、多くの留学生・就学生が、営利目的の悪徳日本語学校や専門学校、斡旋ブローカーに翻弄され、あるいは「異質性」を許容しない日本社会・国家行政によって様々な差別・抑圧に晒される実態が明らかにされる。いわば、留学生・就学生の直面する諸問題を窓口として、利潤増殖の手段として彼らを活用する日本経済、及び、日本の学校教育・地域社会・国家行政に根深く存する「異質性」の排除等々、日本の社会と文化の様々な矛盾が浮き彫りにされ、告発される。

そして第3は、異文化の担い手としての留学生・就学生である³⁾。ここでは、大きく2つの分析方向がある。即ちひとつは、留学生・就学生が異文化を持ち込むことにより、従来の「単一」的な、ないしは「異質性」を許容しない日本文化にいやおうなくインパクトを与え、日本社会に多文化共生・多文化教育の可能性をもたらしているとする論調である。そしてもうひとつは、留学生・就学生の日本社会への「適応」・「異文化適応」のプロセスを明らかにし、彼らの「適応」を促進させる諸条件・ソーシャルサポートの在り方を解明しようとする社会心理学的研究である。

以上の留学生・就学生像は、いずれも実態の一側面ではある。またそれだけに、3つの像のうちひとつだけでは留学生・就学生の全体像は捉えきれず、多くの論者が、その分析・論述の中で、事実上、3つの像を複合的に描き出し、使い分けている。そしてこうした留学生・就学生の像は、それぞれの

* 神戸大学発達科学部社会環境論講座

局面での矛盾・問題を鋭く提起している。

しかし、こうした3つの視角には、それらを繋ぐひとつの重要な留学生・就学生像が欠落している。即ち、自らの「生命－生活（LIFE）」の発展的再生産を基礎として、行為－協働－発達する、当たり前の「人間」としての留学生・就学生像である。そこで、前述の様々な留学生・就学生像がいかなる形で一人格に統合され、また変化するのが明らかにされない。また、前述のいずれの留学生・就学生像も、それだけでは様々な限界を刻印されざるを得ない。

即ち、第1の「出稼労働者」論は、留学生とは、本来、「まじめ」に勉学に励むことで、出身国の経済社会発展や日本との国際協力に貢献する「人材」であるべきとの認識を前提としている。この前提は、教育機関や国家行政にとって、いわばあまりに当然である。しかし、一人ひとりの留学生・就学生の「生命－生活」の発展的再生産と、各国の既存の政治社会システムの維持・発展が常に矛盾なく両立するとは限らない。また海外留学の意義は、狭義の専門的知識や研究の発展にとどまらず、彼我の社会・文化を体験し、社会認識と価値基準の変化、総じて文化変容を遂げ、その中で自らの人生を模索することにあると思われる。従って、こうした留学・就学の広義の意義が、今後の世界社会発展と国際交流にどのように連鎖していくのかを実態に即して明らかにする視点が不可欠であろう。

第2の「被害者」論は、確かに、留学生・就学生が「人間」であることを強調する。しかし、ここでの「人間」とは、しばしば、基本的人権を侵害された「被害者」としての人間である。現実の留学生・就学生は、確かにしばしば深刻な人権侵害に見舞われる。また彼らが来日にあたって判断材料とした情報には偽りも多く、彼らがどれだけ正確な選択を下せたか曖昧な場合も多い。しかしそれにもかかわらず彼らの多くは、誰からも強制されず、自らの意志と判断で、自らの「生命－生活」の発展的再生産を求めて来日した。また日本で経験した様々な社会体験と矛盾の中で自らの社会認識と価値基準を変化させ、その後の人生——「生命－生活」の発展的再生産の路線——を模索・選択する。彼らを真に「人間」として捉えるとは、単なる被害の客体としてではなく、このような自ら意欲し、行為し、発達する主体として捉えることでなければならない。

第3の「異文化の担い手」論は、確かに、人間を文化変容の可能性に満ちた主体として把握する。しかしここでは、そうした文化変容が単なる異文化接触の結果として捉えられがちで、留学生と受入側日本人双方の「生命－生活」の発展的再生産を基礎とする主体的選択の結果と捉える視点が希薄である。また特に「共生へのインパクト」論では、日本社会にとっての異文化接触の意義は語られても、留学生・就学生側の文化変容の内実はいくたびも看過される。さらに異文化共生と同時進行する、異文化差別化のプロセスも見逃されがちである。他方、日本社会への「適応」論は、しばしば既存の日本社会構造を所与の前提とし、そこへの留学生側の「適応」のみが問題とされる。日本社会・文化の変容は、せいぜい留学生受け入れに直接係わるソーシャル・ネットワークや条件整備に矮小化される。各国社会の構造的変動・変革に連鎖するような留学生・就学生の文化変容は取り上げられにくい。

さて、現実のアジア人留学生・就学生は、何よりも自らの「生命－生活」の発展的再生産への指向性を基礎として文化変容を遂げてきた。またその文化変容は、しばしば教育機関内での狭義の専門性の枠を超え、世界社会の構造的変動・変革へと連鎖してきた。その典型例として、清末～第2次世界大戦時に中国革命・反日救国闘争の担い手となった中国人留学生、マレーシア連邦結成に抗議した「シンガポール」人留学生、ベトナム反戦運動に立ち上がった「南ベトナム」人留学生、そして天安門事件への抗議運動で連帯した中国人留学生等々をあげることは容易であろう⁴⁾。また中国政府の留学生派遣政策の変遷に、体制批判につながる留学生の文化変容が少なからぬ影響を与えていることも、しばしば指摘される。さらに、こうしたいわゆる「反体制」的文化変容のみならず、日本での留学生生活を通して、自国の既存の政治社会システムを維持・継続すべきとの確信を一層深めて帰国した留学生も少なくないと思われる。あるいはまた、こうした国家単位での政治意識とは別に、個人主義

的な「生命－生活」の自己防衛的発展へと向かう文化変容も、当然、ありうる。たとえ全くの金儲け・出稼目的の留学であったとしても、それは、現状の日本・母国の双方の社会に対する認識をふまえ、その上で最も現実的に自らの「生命・生活」を発展的再生産させようとのしたたかな判断と選択の結果である⁵⁾。問題は、こうした様々な留学生・就学生の文化変容の方向性に「善悪」のレッテルを張ることではない。むしろ重要なことは、こうした多彩な方向性をもった留学生・就学生の文化変容が、何よりも自らの「生活・生命」の発展的再生産を基礎として、しかも彼我の社会・文化を体験する中で進むこと、そして彼ら自身が意識するとしなないとに関わらず、彼らのそうした社会認識と価値基準の変化・文化変容が、その後の彼らの人生と社会関係を通して、客観的に母国と日本、そして世界社会の構造変動の一要因とならざるを得ないことである。本稿が、留学生・就学生の生活と文化変容を明らかにするといふとき、そこにはこうした射程が含まれている。

さて、こうした諸個人の「生命・生活」を基礎に据えた社会認識・価値基準の変容を把握するためには、いったん、一人ひとりの留学生・就学生の具体的でトータルな生活過程とそこでの選択・行為のレベルにおり、それを支えた彼らの価値基準を解釈するという理解社会学的方法が不可欠になる。そこでは、大量観察による諸要因の相関・傾向の量的分析より、むしろ一人ひとりの生活行為を貫く論理とその変化を丹念に解釈する質的分析が重要である。

そこで本稿では、日本で学ぶアジア人留学生・就学生80名を対象として、インテンシブな事例研究を試みる。本稿で素材とした実態調査は大きく2つの柱に別れる。即ち第1は、札幌・神戸・岡山の3都市で実施した、大学院・大学留学生の調査である。ここでは、国立・私立の大学院・大学で学ぶアジア人留学生46人を対象とした。国籍別には、中国人が31人、韓国人が9人、インドネシア人が6人である。第2は、首都圏で実施した専門学校留学生・日本語学校就学生の調査である。ここでの対象者は、中国人23名、マレーシア人10名である。2つの調査は、1990～94年にかけ、ほぼ同時並行で実施した。なお後者の調査の一部には、1990年度文部省科学研究費奨励研究(A)「国際化社会における外国人出稼労働者の文化変容に関する社会学的研究」の助成を受けた。

《補 注》

- (1) 岡益巳・深田博巳『中国人留学生と日本』白帝社(1995)p42～62・106、小林文男『中国往還』勁草書房(1991)p275～283・304～313他。
- (2) ぐる一ふ赤かぶ編著『あぶない日本語学校』新泉社(1989)、田中宏『在日外国人』岩波新書(1991)p174～178、馬越徹「留学生」中野秀一郎・今津孝次郎編『エスニシティの社会学』世界思想社(1993)、村田翼夫「大学の国際化と留学生教育」澤田昭夫・門脇厚司編『日本人の国際化』日本経済新聞社(1990)、岩男寿美子・荻原滋『日本で学ぶ留学生』勁草書房(1988)等。
- (3) 岡益巳・深田博巳『前掲書』p161～182、岩男寿美子・荻原滋『前掲書』、周玉慧「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポート尺度作成の試み」『社会心理学研究』8(3)(1993)、同「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元」『社会心理学研究』9(2)(1994)、高井次郎「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要』36(1989)等。
- (4) さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書館(1981)、永野武『在日中国人』明石書店(1994)p146～149・153～154、田中宏『前掲書』p8～23、小林文男『前掲書』p284、岡益巳・深田博巳『前掲書』p35・38等。
- (5) ぐる一ふ赤かぶ編著『前掲書』p239～240。

第1章 留学生・就学生の基本属性と生活史

本章では、留学生・就学生の基本属性と生活史を明らかにする。一口にアジア人留学生・就学生といっても、その基本属性や生活史は極めて多様である。そこで以下、①中国人国費留学生、②中国人私費留学生、③中国人就学生、④韓国人留学生、⑤インドネシア人留学生、⑥マレーシア人就学生に分け、それぞれの特徴を浮き彫りにする。

第1節 来日前の基本属性

まず、来日前の基本属性を見る（表1-1参照）。

第1項 中国人国費留学生

まず中国人国費留学生である。ここには日本政府国費と中国政府国費が含まれる。彼らは、平均28.2歳で男性が7割以上と多く、農村出身者が約半数を占める。彼らの両親の職業は、研究者・医師・教員・技師など専門職が約半数を占めるが、これに次いで農業労働者・運輸労働者・製造工・事務員など一般労働者も4割弱と大きな位置を占めている。

彼ら国費留学生の中国での学歴は、3分の2が大学院卒業又は在学中、3分の1が大卒と高い。専攻は理系が圧倒的に多い。彼らは、在学者を除き、全員、大学教員など研究職に従事していた。なお彼らの7割以上は既婚で、3分の2は中国での生活を「平均的」と評価している。

*なお、日本政府国費と中国政府国費の留学生の基本属性には、若干の相違がある。即ち、日本政府国費留学生は、農村出身者が過半数を占め、一般労働者家族の子弟が多く、既婚者と未婚者が合い半ばし、既婚者の一部には子供がいる。これに対し、中国政府国費留学生は、都市出身者が8割を占め、管理的専門職家族の子弟が多く、全員既婚だが子供は皆無である。

第2項 中国人私費留学生

さて中国人私費留学生は、29.8歳と高齢で、男女が相半ばし、都市出身者が圧倒的に多い。両親の職業は研究者・教員・医師・技師・看護婦・編集者など専門職が約6割を占め、次いで父親では行政機関・企業・共産党等の管理職、母親では事務員・製造工・人民公社農民など一般労働者が、それぞれ2割強を占める。

彼ら私費留学生の学歴・職歴には、文化大革命の影響が深く刻み込まれている。

*「私達一家は、文革で青海省の農村に下放された。父は、戦前、日本の慶応大学に留学した医者で、北京で個人病院を経営していたので、文革で批判された。農村で3年間、小学校に通ったが、殆ど厳しい労働ばかりで勉強はできなかった。そこは砂漠のような土地で、農業も難しい。私達は毎日、肥や水を担いで運んだ。とても苦しかった。そこで、母と私は病気になり、北京に戻された。北京で中学と2年間の高校に入ったが、病気のため、主に自宅で療養しながら勉強した。高校を卒業する頃、文革が終わったが、まだ大学入試制度は回復せず、父も病気で亡くなり、家も貧しくて労働力が必要で、弟を大学に行かせるためということもあり、私は進学せずに働いた。最初、長距離列車の服務員になったが、辛いので、工場の鑄造工に変わった。その後、大学入試が回復したので受験した。法学科に行きたかったが、勝手に国が短期大学のような所の文学部秘書科に回した。その専門は嫌いだったが、進学できるだけましなので進学した」(女性)

「中学高校時代、3年間、農村に下放労働で農業の手伝いをした。3年後、都会に戻って自動車工場に入れられた。別に自分が選んだわけではなく、国家の配属。工場では、最初は修理工。そこから抜け出すためには、車のエンジニアの大学に行くしかない。それ以外の専門では、大学に行くことは許されない。それで働きながら勉強

[illegible]

— 153 —

して大学に入った」(男性)

さて、中国人私費留学生の中でも、来日前の学歴・職歴は、①国立大学の理系大学院生（又はそれを目指す研究生）、②同じく文系大学院生（同）、③私立大学生（同）、そして④専門学校生で、それぞれ大きく異なる。

まず第1に、国立大学の理系大学院生は、中国で理系の大学院・大学を卒業し、大学教員など研究職に就いていた。男性が多く、既婚と未婚が相半ばしている。

第2に、国立大学の文系大学院生は、中国で日本語学科など日本関連分野の大学・大学院を卒業し、日本語の通訳・翻訳に従事していた者が多い。女性の既婚者が多い。

第3に、私立大学生は、中国で短大・専門学校を卒業し、販売員・秘書・事務員・製造工など一般労働者として働いていた者が多い。男女は相半ばし、未婚既婚も半々である¹⁾。

そして第4に、専門学校生は、中国で大学を卒業し、研究職や英語通訳翻訳・技師など専門職に就いていた者が多い。男女は相半ばしており、未婚者が圧倒的に多い。

以上のように、中国人私費留学生には、様々なタイプが輻輳している。しかし、彼らはいずれも来日前の生活水準を「やや高い」と自己評価している²⁾。

第3項 中国人就学生

さて中国人就学生は、私費留学生と同様、男女が相半ばし、都市出身者が圧倒的に多い。しかし彼らは、平均25.3歳と若く、文化大革命の影響は希薄である。また彼らの両親は、事務職・機械工・営業職・農業労働者・製造工・縫製工・包装工など一般労働者が最も多い。彼らの多くは未婚である。

中国人就学生の来日前の学歴・職歴には、2つのタイプがある。

第1は、大卒・大学院卒で、技師・記者など専門職従事者である。彼らは平均26.7歳と就学生の中ではやや高齢である。来日前の生活水準は「やや高い」と自己評価している。

第2は、高校・中専卒で、事務員・溶接工・ウェイトレスなどの一般労働者である。彼らは平均23.7歳と特に若い。来日前の生活水準は「平均的」「やや低い」が多い。

第4項 韓国人留学生

韓国人留学生は、平均29.8歳と高齢で、男性・都市出身者が多い。彼らの父親は、議員・校長・管理的公務員・企業管理職など管理職が最も多く、電子部品・食堂等の個人経営者がこれに次ぐ。母親は約9割が無職である。

韓国人留学生の約8割は、来日前、母国で大学院を卒業ないし在学中で、その他も全て大卒である。学歴は高い。専攻は理系が約7割と多い。彼らは、在学中・卒業直後の者を除き、研究職として就職していた。約7割は既婚で、4割以上が自らの生活水準を「高い」・「やや高い」と評価している。

なお韓国人留学生には日本政府国費と私費がいるが、来日前の基本属性では、両者の間に中国人留学生のような明確な差異は見られない。

第5項 インドネシア人留学生

インドネシア人留学生は、男性が多く、農村出身者が3分の1を占める。彼らの父親は政治家・管理的公務員等の管理職、母親は無職がそれぞれ3分の2を占める。

インドネシア人留学生には2つのタイプがある。第1のタイプは、来日前、理系の大学・大学院を卒業し、研究職に就いていた者である。彼らは30歳以上で既婚、自らの生活水準を「やや高い」と評価している。第2のタイプは、高校卒業直後、又は、大学在学中の学生である。彼らは21～22歳で未

婚、自らの生活水準は「平均的」と評価している。

なおインドネシア人留学生には日本政府国費とインドネシア政府国費がいるが、上述の2つのタイプとは必ずしも相即しない。即ち、日本政府国費にもインドネシア政府国費にも、それぞれ上述の2つのタイプの留学生が含まれる。

第6項 マレーシア人就学生

ここで対象とするマレーシア人就学生は、全員中国系である。彼らは平均19.2歳と若く、未婚で、高校卒業直後に来日した。男女が相半ばし、都市出身者が7割を占める。彼らの父親の職業は各種自営業・個人営業が圧倒的に多い。母親は無職又は家従である。彼らマレーシア人就学生の8割は、自らの生活水準を「平均的」と評価している。

第2節 来日の動機と不安

では次に、来日の動機・目的、及び、来日に伴う不安を見よう（表1-2・3参照）。

第1項 中国人国費留学生

まず中国人国費留学生である。彼らは、もともとアメリカなど日本以外への留学を希望していた。日本希望者も、それは第二希望であったことが多い。日本以外を希望した主な理由は、「研究水準の高さ」と「英語圏であること」である。彼らは、「母国政府・所属機関の決定」により、半ばやむなく留学先を日本に変更した。また日本政府国費では、「他国より先に日本政府の奨学金が決まった」ため、来日した者も少なくない。

彼らの留学の目的は、「専門研究の深化」が最も多く、「博士号取得」が次ぐ。特に中国政府国費留学生の留学目的は、この2つに限定される。なお彼ら国費留学生には、もともと特に留学を希望せず、政府・所属機関の指名・決定で留学してきた者もある。そこで彼らの動機・目的には、「自国の要請」・「祖国への貢献」という要素も見られる。

彼らは、来日に際し、日本語の問題を最も不安に感じていた。彼らは、来日決定後、半年～1年半の日本語教育を受けた。しかし彼らは、もともと日本への留学を希望していたわけではなく、主要外国語として日本語を学んだわけでもない。また中国政府国費留学生では、健康や研究の進捗、家族の来日に関する不安も大きかった。健康や研究の進捗に不安を抱くのは、彼らが、学位取得と専門研究に目的を集中させ、しかも自国政府や所属機関に対して特に強い責任感を感じていたためである。また家族の来日に不安を感じるのは、彼らに既婚者が特に多く、配偶者が日本でどのような生活を送るのかは、彼ら自身のそれ以上に不明確であったためである。

*「アメリカを希望していた。世界の基礎的学問の領域ではアメリカが一番。日本は応用技術だから。それに研究の言葉というと英語ですね。中国では、留学先としては、アメリカが一番と言われている。でも中国政府の決定で日本に決まった。奨学金が得られるということで。留学の目的は、一つは博士を取ること、もう一つは研究を深めること。不安だったのは日本語。日本に来ることが決まって、半年間、日本政府が作った大学日本語講座で特訓を受けた。でも、それまでは全然できない。英語なら大丈夫なのだが」(日本政府国費)

「最初は留学は考えていなかった。政府が決めて、学部長から言われた。修士2年のとき、たまたま日本語の集中講義を受けていたら、突然来ることになった。留学する以上、まず第一に博士の学位、第二に専門研究を深める。中国の半導体は遅れているから、留学すればこの分野で何かできると思って。今は国の建設が一番大切だと思う。祖国の発展に貢献する。それが目標。一番の不安は日本語。半年位、日本語の訓練を受けたが、本格的には勉強してなかったのだから」(日本政府国費)

[illegible]

表1-3 就学生・専門学校生：来日の動機・目的・関心・不安

		来日の動機・目的 イロハその他	来日前、日本に関心が あった点	来日時 の身元保証人	来日前の不安 A:B:C:D:E:その他
中国 専門 学校	①	○日本の工業発展に学ぶ	工業発展・文化交流	姉の夫(残留孤児)の友人	○
	②	○自由を求めた中国脱出(言語・職業選択)	自動車	中国への観光旅行者	○
	③	○貿易ビジネスの知識	生活習慣・考え方	かつての仕事の知人	○
	④	○人生の模索・自由を求めた中国脱出(表現)	やくさ・義理	父の仕事の知人	○
	⑤	○日本社会観察・中国社会への不満	特になし	先に来日した友人の知人	○
	⑥	○視野の拡大・才能の伸長	日本人と日本社会	かつての仕事の知人	○
	⑦	○視野拡大・職業選択の自由を求めて	精神・経済発展・便利さ	日本語学校の紹介(有料)	○
	⑧	○勉強。金を稼ぐ。	ファッション	かつての仕事の知人	○
	⑨	○貿易の勉強。視野の拡大。	日本全体・旅行	母の知人	○
	⑩	○専門性を求ため。	生活・経済発展	伯母の知人	○
日本 大学 以上 日本語 学校	①	○先進技術の修得。(低い生産性・生活里調)	株式・証券	父の仕事の知人	○
	②	○(職業選択の自由を求めて。(所得に不満)	生活様式	(参議院議員)	○
	③	○(政治・サービス・交通に不満)	生活の便利さ	先に来日した友人の知人	○
	④	○政治に不満(自由・民主)。(人間関係に不満)	食物	先に来日した姉の友人	○
	⑤	○先進技術・職業の自由求めて。(交通に不満)	先進技術・文化	中国への観光旅行者	○
	⑥	○夫(大学院生)の援助	高等教育水準・経済発展	親戚(在日中国人)の妻	○
	⑦	○哲学の勉強	なし	夫の知人(宗教関係)	○
	⑧	○(政治に不満・表現の自由)	日本人の友人	兄の友人	○
	⑨	○企業経営の勉強。(所得に不満)	電器製品	父の友人	○
	⑩	○経済の勉強。(兄が先に留学)	日本人と友人になる	姉の夫(残留孤児)の知人	○
高校・中 南 女性 マレー シア	①	○日本は先進国・漢字の国。恋人が来日。(人間関係に不満)	就学生に対する見方	兄の友人	○
	②	○国外見ると、才能・経験の伸長。(仕事に不満)	風俗人情	自分の知人	○
	③	○農学の勉強	山口百恵・流行歌	先に来日した友人の知人	○
	④		政治	先に来日した友人の知人	○
	⑤		日本人と友人になる	日本語学校の理事長	○
	⑥		政治・経済	日本語学校の理事長	○
	⑦		生活	日本語学校の紹介	○
	⑧		経済発展・工業	日本語学校の事務局長	○
	⑨		生活水準	日本語学校の紹介	○
	⑩		生活	日本語学校の理事長	○
女性	①	○経営の勉強	物価・伝統文化	日本語学校の紹介	○
	②		日本全体	日本語学校の理事長	○
	③			日本語学校の紹介	○
	④			日本語学校の理事長	○
	⑤			日本語学校の紹介	○
	⑥			日本語学校の理事長	○
	⑦			日本語学校の紹介	○
	⑧			日本語学校の理事長	○
	⑨			日本語学校の紹介	○
	⑩			日本語学校の理事長	○

注) ①は、直接、来日の動機に結び付いたか否かは明確ではないが、来日前に感じていた問題点。
来日の動機・目的：イ＝大学院進学、ロ＝大学進学、ハ＝日本語習得
来日前の不安：A＝出国の資格がとりにくい、B＝職場を離れるのが不安、C＝家族と離れるのが不安、D＝日本の生活が不安、
E＝将来、帰国後の生活が不安
実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースNOは表毎に不統一。

「もともと留学自体あまり考えていなかったし、留学するならアメリカに行きたかった。アメリカなら、英語をずっと勉強してきたから言葉の問題がない。それにアメリカは、日本より、研究水準が高い。日本にきたのは国の派遣。アメリカには1年上の先輩が行ったので行けなくなった。中国の教育委員会と大学が、いろんな国に出した方がいいという方針だった。それで私は日本になった。留学の目的は、専門の研究を深め、博士を取ること。それが自国の要請だから。日本語が心配だった。中国の日本語学校で、留学が決まってから半年間しか勉強していないので。それと私はもともと体が弱いし、日本に行くとなると研究で忙しいことがわかっていたので、それが心配だった。薬を1キロもってきて、医学・精神医学の本もたくさん読んだ。病気になったら大変だと思った。学位も取れないし、研究もできない。それと妻のことも心配だった。妻が日本に慣れられるかどうか。それと日本のビザは取りにくいので、妻が来日できるかどうか。実際、妻の来日に3年半かかった」(中国政府国費)

第2項 中国人私費留学生

さて、中国人私費留学生の動機・目的・不安は、前節で見た4つのタイプ毎に異なる。

まず第1に、国立大学の理系大学院生は、「研究水準の高さ」や「英語圏であること」を理由に、アメリカなど日本以外への留学を希望していた。彼らの留学の目的は「専門研究の深化」と「博士の取得」が多い。総じて彼らの動機・目的は、国費留学生に似ている。ただし、彼らが留学先を日本に変更した理由は、国費留学生とは異なり、日本の大学関係者——父親の共同研究者・客員教授・友人の留学先大学の教授等——を介して受け入れの確認がとれたことである。彼らは、来日に際し、日本語の不安もさることながら、それ以上に生活費や学費の不安が大きかった。

*「本当はアメリカのI大学に行きたかった。そこの有機化学は有名だから。それに英語は勉強していたので、まず英語圏に行こうと思った。日本にしたのは、恋人が日本の大学に留学した。それで日本でもいいと思って、恋人と同じ大学の自分の専門に合う先生に、受け入れてもらえるかどうか聞いてもらった。私費の場合、先生が受け入れてくれるかどうか大事だから。不安は、私費留学生だからお金の問題。生活費や学費をどうするかということ。奨学金がだめだったら、アルバイトしなきゃだめだと思ったが、バイトがあるかどうかもわからない。中国では、勉強のお金は全部国が出す。自分で払わない。日本は経済大国なのに、こういう点がよくわからなかった。言葉は、来日前、3カ月位の日本語速成コースに行った。日本語の自信はなかったが、英語ができるから、専門の勉強は大丈夫だろうと思っていた」

第2に、国立大学の文系大学院生は、専攻・職歴が日本・日本語関係であるため、第一希望の留学先は最初から日本であった。彼らの来日の主な目的は、「日本の生活体験」を通して、「日本語の一層の上達」、「日本人の友人作り」、「日本社会の観察」等を果たすことであった。また、日本語能力を基礎として、日本で別の専門を学び、修士や博士の学位を取りたいという希望もあった。彼らは、中国での専攻・職歴を通して、大学関係者以外の日本人と知り合い、その人を保証人として、来日を実現した。なお彼らには、来日に伴う不安は比較的少なかった。なぜなら彼らは、来日前から日本語能力を生かしたアルバイト(日系企業の通訳等)で一定の資金を蓄え、また来日後も日本語ができればアルバイトが比較的容易であろうと考えていたからである。そこで彼らの主な不安は、自分自身のことより、むしろ高齢化した両親の問題となっている。

*「大学時代の専門が日本語。卒業後、省人民政府の訪中団・訪日団の通訳で、省と日本の文化・経済交流について提案・企画する仕事をやっていた。だから日本にずっと関心があった。日本で実際に生活してみたいという気持ちも強かった。日本にくるにはだれか日本人に保証人になって頂かなければならないが、私には仕事の関係上、たくさん知人がいた。日本語はもうある程度できるので、それを生かして留学すれば、いろんな職業の可能性が広がる。経済学の修士をとって、政府の経済政策の企画部門に入りたいとも思った。できれば博士も考えた。両親の健康問題が一番の不安。経済面は、不安は不安だが、何とかなる。中国で300万円位ためてもってきた。

これだけあれば中国では一生食べられる額だ。大学時代からずっと、日本企業関係の通訳のアルバイトをやって貯めた」

「大学が日本語専攻で、高校の日本語教師や日本向け雑誌の編集をしていたから、いつも日本と係わりがあった。日本人の友人もあった。そういうところから自然に留学の情報は入ってきた。仕事の関係で知り合いになった日本人が『勉強したいのなら、留学した方がいい。身元保証人になってお金も貸します』と勧めてくれた。それで日本にきた。日本語を勉強することは、私の専門を深めることにもなるし、実際に日本で生活してみてもいろんな社会観察をすることは私の仕事に大変役立つと思った。両親の健康が不安。それとももちろん私費だから、奨学金がもらえるとか、アルバイトはあるとかも不安だった。でも勤めていた会社が中国ではわりといい会社で貯金があった。先に留学した友達に聞くと、日本語ができればアルバイトは必ずあるからと言われて安心していた」

「中学時代、日本語を習い初めてからずっと日本に興味があった。大学の日本語学科を出て、通訳になって、ますます日本に行きたいと思うようになった。もっと日本語のレベルを高めるために。それに日本の教育とか家族環境とか、普通の日本人の生きている姿、ナマの現実を見てみたい。日本人をもっと理解したいと思った。国境を超えてみんな友達になりたいじゃないか。来日時の不安は、両親のこと。年をとっているから健康も心配だし、中国の物価がどんどん高くなっているから親の給料ではやっていけないと思った」

第3に、私立大学の大学生も、日本が第一希望であった。しかしそれは必ずしも積極的な選択の結果ではない。彼らの留学の目的は、ひとつには、文化大革命等で阻害された専門教育を受けること、そして同時に中国を脱出して他国での生活を経験することであった。留学先は、ある意味で、どこでもよかった。彼らが日本を第一希望にしたのは、たまたま友人・知人が日本に留学していたり、あるいは観光旅行で中国にきた日本人と知り合うなど、日本人に保証人が確保できたためである。彼らの来日に伴う不安は、日本語の問題に加え、日本での専門の勉強についていけるかどうかであった。

*「海外での生活が経験したかった。それに来日前、文化大革命の影響で大学に行けなかった。だから国を出て、自分の好きな専門を勉強したいと思った。国際取引・貿易の法律を勉強して将来に生かしたかった。たまたま今の身元保証人が中国旅行に来たとき、私が観光ガイドを担当した。その人が、身元保証人になって、大学も紹介してくれるということだったので、日本に留学することにした。もしこういうことがなかったら、アメリカ・カナダ・オーストラリアに行ったと思う。不安は日本語。全然、勉強したことがなかったから」

「姉が日本に留学していたので、私もきた。他国に出てみたかった。身元保証人も姉が紹介してくれた。中国では大学に進学できなかったの、できれば頑張って勉強して日本の大学に入りたいと思った。具体的な専門ははっきり決まらなかったが、とりあえず日本語を勉強しておけば、どんな仕事をするにも役に立つ。不安は、日本語の問題と日本での勉強についていけるかどうか」

そして第4に、専門学校生の留学の動機・目的には、専門的学習は殆どない。彼らは、まず何よりも中国を脱出して他国で生活し、それを通して自らの視野を拡げ、人生を模索するために留学してきた。彼らの中国脱出の理由は、職業や表現など市民的自由の欠如、及び、中国では自らの能力を発揮できないとの葛藤であった。彼らが脱出先として日本を選んだのには、2つ理由がある。一つは、既に知人・友人が日本に行っており、保証人等が確保しやすかったことである。そしてもう一つは、「経済大国」としての日本社会からは学ぶべき点が多く、また日本で日本語習得や貯金をすれば、今後の人生に生かせると考えたからである。来日に際して、彼らは、中国での比較的安定した生活を中断し、場合によっては莫大な借金を背負った。彼らの来日に伴う不安は、来日後の生活費や日本語の問題以前に、出国資格が取れるかどうかにあった。また彼らは、中国での職業生活を清算し、あるいは留学資金を借金して日本に脱出するため、留学期間終了後の将来の生活展望にも不安を感じていた。

*「とにかく中国を脱出したかった。それは自由のため。中国では政治的に批判があっても口に出せない。また日本なら、この仕事が好きでなければ他に移れるが、中国では転職も難しい。私は、文化大革命で農村に下放され、3年後、都会に戻って今の自動車工場に入った。自動車工場に入ったのは、たまたま私の希望と一致したが、それは全く偶然。自分で選んだわけではない。友人には、希望と全く違う所に行かされ、今も我慢している人が多い。自分は最初は修理工で、そこから抜け出すためには車のエンジニアの大学に行くしかない。それ以外の専門では大学にも行けない。それで働きながら勉強して大学に入り、卒業後、元の工場に戻った。ここまでの人生には、自分の選択は全く入っていない。一步一步、全部、国家の分配でやってきた。すごくいやだ。ずっと出国のチャンスを探していた。大学卒業の休み、密入国でタイとラオスの国境に行った。そこには中国系住民がたくさんいて、麻薬の栽培をしていた。すごく危険なところで、みんな銃をもっている。帰りの検問でフィルムを全部没収された。友人と2人で行き、友人はそのままそこに残った。パキスタンに密入国するルートも友人が話をもってきた。私は、パキスタンは生活するには不便だと思って、その話には乗らなかった。日本に来るとき、父母は、私が外国に行ったら帰ってこないということを知っていて反対した。それでも自分はどうしても外国に出たかった。身元保証人は先に日本に行っていた友人が探してくれた。日本の場合、いくら金があっても、勉強名目でなければ来られない。それで勉強に来た。出国の資格を得られるかどうかが一番の不安だった。パスポートを出すとき、中国側はいろいろ無理を言う。保証人についていろいろ聞かれる。友人に保証人を紹介してもらったので、その人にあまり詳しくないというので、『会ったこともないのに何で保証人を頼めるんだ』と厳しく問われる。それだけで2カ月位かかる。外国に行くのは難しい。それと日本の方もビザの審査期間が長い。手続きが難しく複雑。だからこそ外国にいる今の体験を大事にしなければならない」

「本当の人生を探すために日本にきた。中国には自由がない。例えば、私は趣味で音楽のロックをやっていたが、ロックは大きな会場ではだめ。小さな場所だけでしかできない。日本に行けば、自分のやりたいことができる。私が中国で作った歌詞は、本当の歌詞ではなかった。日本に行けば、本当の歌を作って歌える。本気でない歌詞とは、国のいろいろの運動のために、というような歌詞で、どんな歌詞を作ったかは、自分でも覚えていない。そんな歌詞はすぐ忘れる。本当は、中国の問題について、いろいろ歌いたい。でも、公演のときは、そういう歌詞は許可されない。中国で、こんな歌詞を作ったが、許可されなかった。『転倒した世界／私は目覚めているが、まるで眠らされているようだ／私はドアに向かって歩いたつもりだが、実はドアが私に向かって開いただけなのだ／なぜ、私は、こんなに迷いながら生きているのだろう／なぜ、この世界は、ありのままの私を受け入れてくれないのだろう』。この歌詞は、中国では禁止された。中国の社会に不満を持っていることがわかるから。また、こういう歌詞も、中国ではだめだった。『誰でも、かつて経験したことがある／でも、かつて失ったこともある／今、今こそ／私には思い出の河がある／でも、今、そこに本当は誰がいたのかわからない／今、誰を恨めばいいのかもわからない／今、誰を愛したのかもわからない／なぜならそこに、本当の私がないからだ／私は、これを虚ろな河だと思う／この世界は、なぜ私を受け入れてくれないのか』。来日に際しては、将来が不安だった。来日するためには、日本円で100万円位使った。授業料や生活費、アパートを借りる金、そしてそういう手続きを全部、先に日本に来ている友人がアルバイトを休んでやってくれたので、そのための生活費を送るとか、そういうことで使った。日本に来て、こんなに金を使って、しかも中国に帰ったら仕事なくなっているかもしれない。3年間なら元の職場に戻れるが、4年間日本にいたら戻れるかどうかかわからない。大きな賭けだった。私が職場をやめると言ったら、みんなびっくりした。生活の『安定』だけを考えたら、来ない方がいいのははっきりしているのだから」

「中国以外の世界をあちこち見てみたかった。以前は中国は閉鎖的な状況で、外国がどういう状況かわからない。開放政策で情報が入ってきて、それで行ってみたいなと思うようになった。それと、日本は、戦争のときは貧乏だったのに、なぜ短期間で豊かな経済大国になったのかを知りたかった。テレビの『おしん』が好きでよく見たが、『おしん』の精神は、日本資本主義と関係があるのでしょうか。日本人が本当はどんな精神をもっているのか知りたいと思った。精神世界と物質世界の関係ですね。経済大国・日本の商品にはどんなものがある

るのか、どんなものが便利なのか、それを体験してみたいと思った。それともう一つ、中国では自分のやりたい仕事ができなかった。私は英語の通訳の仕事がやりたいのに、許してくれない。細かい数字の資料の翻訳ばかり。数字ばかりでなく、直接人間と接する仕事やりたかった。通訳の部署からも、ぜひ来てくれと言われていた。でも、いくら言っても私の上司は認めてくれない。どうしようもない。仕事をやめて日本にきたのは、日本語と英語と両方をマスターすれば、中国ではその後は何とかなるだろうと思ったから。日本語を少しでも早く覚えるには、やっぱり留学が一番。それと、前の仕事は給料はわりとよかったのだが、そのときはお金はそんなに大事と思わなかった。それより自分の生きがいというか、仕事の中身の方が大事と思った。日本にくるための身元保証人は、日本語学校にお金を払って紹介してもらった。私がきたときの相場は、半年5万円だった。今なら20~30万円かかる。保証人紹介専門の会社がある。中国では、普通、大学卒業後5年位で出国資格が取れる。私がくる前の年から、5年以下の人は出国できなくなった。私は5年たっていないから苦労した。コネもなく、だれも助けてもらえないから出国が難しかった。それに日本側のビザも取りにくい」

第3項 中国人就学生

中国人就学生の第一希望の就学先は、ほぼ全員、日本であった。それは、日本が「経済大国」で学べべき点が多く、また先に来日した友人・兄弟等を介して、出国に必要な保証人を確保しやすかったからである。また彼らのうち大卒以上の者は大学院への進学、高校・中専卒者は大学進学を、それぞれ希望して来日した。

ただし、彼らのより基礎的な来日動機や不安は、大卒以上と高校・中専卒の者ではっきり異なる。

まず大卒以上の者の動機には、中国社会に不満を抱き、政治的・市民的自由を求めた中国脱出という要素が強い。彼らの来日に伴う不安は、出国資格が取れるかどうかであった。その意味で、彼らの動機や不安は、専門学校生のそれと似ている。

*「日本に来た第1の理由は、中国の政治にちょっと納得ができないから。中国は多党制でないし、報道の自由もない。自由や民主の問題がなければ、私は外国に行かなかったでしょう。中国が大好きですから。第2の理由は、外国語の勉強。テレビ局の職場で時々外国人と一緒に仕事をした。外国語が重要だと痛感した。第3の理由は、大学院に進学したかった。来日するときの問題は、会社が出国に賛成しなかったこと。なかなか手続きを出さない。日本側の入国管理も厳しい」

「日本語を勉強して、将来、大学院に入りたいと思って来日した。それに、中国では、自分のやりたいことが難しい。私は技術方面について研究したかったが、エリートの許可が下りない。やりたい仕事に移れない。日本は今、世界で第一の経済大国だから、日本の学校で先進技術を勉強したいと思った。来日する時の不安・問題は、会社の阻止力。会社が出国に賛成しない。いろいろ手続きの問題を作って阻止しようとする。中国の大卒者の出国についての政策があるから。それと日本のビザは複雑で日本側の効率も低く見える」

他方、高校・中専卒の就学生は、むしろ「『経済大国』の日本で、経済・ビジネスを学び、今後の職業生活に生かしたい」という意識が強い。開放政策の中で育った若い彼らは、留学による大学進学も経済的成功の手段と考えている。また彼らの中には、もともと英語を勉強していなかったり、苦手だったりしたので、「漢字の国・日本」への留学を希望した者もいる。彼らの主な不安は、初めて両親と別れて暮らすことへの不安である。

*「日本で企業経営の勉強をして、帰国後、自分で会社を経営したいと思った。日本はすばやく発達した経済の国だから。大学に進学して経済・経営を勉強したい。経済・経営の知識を多くマスターできれば、将来の生活にとって有利だと思う。日本語も将来のビジネスには重要だ。それと私は英語は勉強したことがない。中国で勉強した外国語はロシア語だった。日本なら漢字があるから、少しはわかると思った。不安は家族と別れること。自分はこれから独立して何でもやらなければならないと思うと、不安だった」

第4項 韓国人留学生

韓国人留学生には、日本を第一希望の留学先としていた者が多い。日本を希望した理由は、国費留学生と私費留学生でやや異なる。即ち、国費留学生は「専門内容が合致」、「研究条件がよい」、「専攻が日本に関連」など、研究に直接係わる理由が多い。これに対し、私費留学生は「母国の指導教員が日本の教員を紹介した」という理由が多い。韓国人留学生の留学の主な目的は、国費・私費を問わず、「専門研究の深化」と「博士号取得」が多い。来日に伴う最大の不安は、自らの健康である。私費留学生では、これに日本語や学費・生活費の不安が重なっていた。

*「留学の一番の目的は博士の学位を取ること。勉強が第一。専門が日本近代史だから、日本の国の様子を見ること自体、専門の研究の助けになる。不安は健康問題。韓国にいたときから体は丈夫でなかった。ストレスで胃潰瘍になり、病院に行った」(国費留学生)

「私の大学の先生で同郷の人が日本のH大学卒で、その人が紹介して、日本の先生に手紙を出してくれた。日本以外の国は全く考えなかった。先生のおかげ。留学の目的は、研究して博士を取ること。留学で一番大切なのは、勉強。いい論文を書いて学術雑誌に載る。韓国に戻っていい仕事をするために、ぜひ学位を取る。不安は健康。病気になっても勉強するしかないから。日本語も不安だった。来日するまで日本語を勉強したことがほとんどない。勉強のためには日本語が必要だ。それと、私費だからお金の問題もある。生活費や住居費・授業料がどれ位だとか」(私費留学生)

第5項 インドネシア人留学生

インドネシア人留学生は、当初、アメリカやドイツなど日本以外への留学を希望していた。それは、「研究水準の高さ」、及び、「英語圏」という理由である。日本は漢字圏を理由に、やや敬遠されていた。しかし彼らは、「母国政府・所属機関の決定」により、留学先を日本に変更した。また既に研究職に就いていた留学生は、他国にも留学を申し込んでいたが、日本の試験結果が先に出たため、日本への留学を決意した。彼らの留学の主な目的は「専門研究の深化」である。そして主な不安は、研究・勉強についていけるかどうかであった。

*「アメリカのK大学が第一希望で、TOEFLも取って申し込みも出した。日本も考えたが、漢字のハンディがあったので大変だと思った。でもインドネシアの文部省から、日本にしなさいと言われた。アメリカの返事がくる前に決めなければならないので、日本にした。多分、待っていればアメリカに行けただろう。私は原子炉研究所に勤めていて、原子力発電所建築の技術を勉強するために留学した」

「インドネシアで私の分野の科学者は、だいたいドイツの大学を出ている。申込書には、第1にドイツ、第2に日本と書いた。でも日本は漢字がわからないので難しいと思っていた。インドネシア政府は日本に行きなさいと言った。何でドイツでないのかわからなかったけど、政府の奨学金で政府が決めたことだから。最初はどのようにかと心配した。留学の目的はまず勉強。私はインドネシアでは機械を学んだが、留学先では物理関係を学びたかった。しかし、日本に来る前に人と話していて、物理学という専門は難しいと思った。留学して勉強についていけるだろうかと不安になった」

第6項 マレーシア人就学生

マレーシア人就学生は、もともと日本への留学を希望していた。彼らは、日本の経済や政治に強い関心を抱き、経済・経営関係を中心とする大学進学を目指して来日した。彼らの不安は多様だが、特に女性を中心に、初めて家族を離れて自立することへの不安が大きかった。

さて次に、来日後、今日に至るまでの在留資格・学校・学籍の変遷を見ておこう。

第1項 中国人国費留学生

ただし、国費留学生、特に中国政府国費留学生には、日本での研究領域が「希望・予想と違う」と感じている者が少なくない。それは、来日前、所属講座の研究内容に関する情報が不十分で、また、本人の意向を十分確かめられないまま、日中両国政府や指導教授が講座所属を決定してしまったためである。そこで彼らの一部は、来日後、研究内容を変更したり、事実上、教員の指導を受けられずに単独で研究することを余儀なくされた。また日本政府国費留学生の中には、逆に受入教員側の意向を確かめられないまま、政府が講座所属を決定したため、結果的に事実上受け入れられず、他大学に移

[illegible][illegible]

注)学校・進学：日＝日本語学校。
実態調査より作成。プライバシー保護のため、ケースNOは表毎に不統一。

らざるを得なかった事例もある。

*「中国では大学の専門をそのまま生かして仕事をするので学位論文は大切なのだが、私の場合、中国での専門は機械で、日本での専門は化学的な処理技術。日本の大学の都合でそうだった。私は、論文をみて今の大学・講座を希望した。でもその先生は、たまたま他の人と連名で発表しただけで、本当のテーマは違っていた。それは日本にきてからわかった。今の大学には機械の講座もあるが、その先生が受け入れてくれるかどうかかわからない。それで今の講座に入るしかなかった。化学についての専門教育は受けていないので、いろいろ教えてほしいかったが、もらえなかった。両親に本を送ってもらって独学した。この大学のこの講座はこんな研究をやっているという、毎年の研究計画が、もっと事前にわかっていれば、こんなことにはならなかった。留学生が手紙を書けば、簡単に答えてくれるようなものがほしい」(中国政府国費)

「来日前は大学の情報が殆どなく、調べられなかった。それに、修士では希望した大学に入れなかった。残念だ。なぜ希望通りじゃないのか、わからない。自分には相談なく、政府の要請ということで決められた。最初から博士に進学したいという希望はわかっていたはずなのに、博士課程のない修士だけの大学に回された。それで修士を終わってから今の大学に移った。もっと事前に、各大学の特徴などについて詳しく教えてほしい」(中国政府国費)

「自分の研究内容からいくと、別の大学の方がよかったと思う。今の大学も第3希望で出したが、やっぱり第1希望の大学の方が、研究内容からいくと合っている。3つの希望を出して、たまたま日本の文部省とこの大学の教授が決めた。事前に、日本の大学の仕組みや講座が何をやっているかが全然わからなかった。先生の専門とずれているから、1人で研究するしかない」(中国政府国費)

「専攻は、中国にいたときと基本的には同じだが、想像していたよりも少し違った。今の講座は応用重視。基礎は一応やっているが、想像よりもちょっと頼りない。私はもっと基礎科学がやりたかった。一応、今の講座の研究内容に合わせてやっているけど、今からみると情報が足りなかった。講座の研究内容について事前に調べても、一般的な資料しかなかったから」(日本政府国費)

「別の大学で1年研究生をやった。その大学はひどい。日本政府の国費なのに、最初からマスターに受け入れる気がない。博士号も出さない。日本人でも難しいのに、外国人にわかるわけがないという態度。でもそれは自己満足。外国に通用しない研究は、そのレベルのものでしかない。今の大学に移って本当によかった。もし前の大学に1年いだけで帰国していたら、日本人や日本に対して悪感情しかもたなかっただろう。今の大学にきて、日本の大学教員にもいい人がいるとわかった。留学生は来日して不安な生活だから、そこで冷たくされると絶対忘れない。国際交流でなく、国際反感しか育たない」(日本政府国費)

第2項 中国人私費留学生

さて、中国人私費留学生の来日後の在留資格・学校・学籍歴は、4つのタイプ毎に大きく異なる。

まず第1に、国立大学の理系大学院生は、当初から留学生の資格で来日し、現在の大学の研究生となり、半年～1年後に大学院生となっている。彼らは、来日前に日本の大学教員と知り合い、連絡を取り、当該大学・講座の研究内容を直接聞き、また受け入れの承諾も直接確認した上で、来日した。そこで、来日後の研究内容は、彼らの中国での専門・希望とほぼ合致し、特に問題は生じていない。

第2に、国立大学の文系大学院生の、来日時の在留資格は多様である。即ち、当初から留学生ビザで来日して国立・私立大学の研究生になった者もいれば、就学生ビザで来日して日本語学校の上級クラスに在籍した者もいる。また中国語講師の就労ビザ、留学生の配偶者ビザで来日して、一定期間、アルバイトや仕事に専念した者もいる。ただしいずれにせよ彼らは、その後、比較的学費の安い国立大学の大学院を受験・合格して、留学生ビザに切り換え、今日に至っている。彼らは、来日前の専攻である日本語を基礎に、来日後、多様な人文社会科学に専攻を変更している。彼らの専攻決定は、もちろん彼ら自身の興味・関心に基づくが、しかしそこにはかなり柔軟な選択の幅がある。そこで彼ら

の中には、「指導教員に受け入れてもらうため」、又は、「大学院に入りやすそうだから」と、もともと希望していた専攻を変更した者も少なくない。ただしそれはあくまで自らの「現実的な判断」によってなされた変更であり、彼ら自身は、そのことに特に大きな不満は感じていない。

*「最初、大阪の日本語学校で就学生として来日した。その後、大学はA県に行った。地方の方が生活費が安いし、保証人がA県の人だったので、学費が安いので国立大学を選んだ。最初は教育学部に入る予定だった。日本語教育の教授が受け入れてくれる約束で、日本語教育を勉強するつもりだった。でも教務掛に行くと、いろいろ難しくてだめになった。それで経済学部にした。日本経済史を希望したが、経済史の先生は受け入れてくれない。それでやむなく財政学にした。いくら勉強したいと思っても、引き受けて頂く先生がいないとだめだから。今は財政学で満足している」

「夫が国費留学生だったので、配偶者ビザで来日した。その後、半年間、東京に出て、アルバイトして学費を貯めた。その後、夫の住むB県の大学院を受験した。そこを選んだのは、国立で学費が安いから。最初、国際貿易関係の法律を勉強したいと思って法学部の先生に話を聞きに行ったが、専門知識がないからどうも難しい。それから国際経済・商業を勉強しようと思って経済学部に行ったが、その先生は留学生は受け入れませんと言われた。それでどうしようかと思ったが、もっと身近な分野で、留学生を受け入れてくれて、しかもおもしろそうな分野ということで社会学にした。今、考えると、社会学は自分にあっていると思う」

「最初、雑誌社から派遣されて1年半、中国語講師として単身赴任していた。留学したかったが、お金もないし、夫や親のこともあったから帰りたいと思っていた。でも、お金の問題も解決して、家族みんなが励ましてくれたので残った。日本での仕事を通して、もっと日本を知りたい、中途半端な旅行の見物ではなくて、日本の社会を勉強したくなった。それで、アルバイトが多そうな都市で、学費が安い国立大学で、日本社会について勉強ができそうな大学ということで、今の大学の先生に受け入れて頂いた」

第3に、私立大学の大学生や研究生の来日後の経歴は、さらに多彩である。まず、大学生の中には、就学生として日本語学校に1～2年通い、その後、私立大学に進学した者がいる。またその過程で、国立大学を受験して失敗し、いったん帰国した後、再来日して私立大学に再挑戦した者もいる。さらに高校の交換留学生として来日し、その後、日本にとどまって、私立大学に進学した者もいる。研究生の中には、そもそも進学を目的とせず、「日本語学校より大学研究生の方が学費が安いから」と、最初から私立大学に籍をおいた者もいる。また当初、国費留学生として来日し、国立大学で博士号を取得した後、私立大学の研究生となった者もいる。いずれにせよ彼ら私立大学の私費留学生の専攻は、多くの場合、かなり漠然とした人文社会系である。彼らが現在の私立大学に入ったのは、大学生の場合、もちろん入学試験を受けて合格したわけだが、研究生の場合は受入教員との人間関係によることが多い。こうした複雑な経路を反映して、彼らの中には、現在の大学・講座にきたことが、「必ずしも希望通りとは言えない」と感じている者も少なくない³⁾。

*「今、法学部の研究生をしているが、大学の専門は特にこだわらなかった。来年、受験するかどうか決めていないし、もう1年研究生をやって帰ろうかと思っている。ただ外国語はどんな仕事をするにも重要だ。だから、本当は専門は言葉、日本語学科に入りたかった。でも日本語学校の授業料は高いから、今の大学の研究生になった。今の大学の先生は、先に来日していた姉の紹介で頼んだ」

「最初、日本語学校に1年間行って、国立大学を受けたが入れなかった。それでビザが切れたので帰国した。その間に、国立大学の先生と連絡して研究生になれないかと頼んだが、その年は国費留学生が多くて私費はとらないということだった。それで、今の私立大学の先生を紹介してもらった。それで再来日して、すぐ今の大学にきた」

「高校の姉妹校の関係で日本の高校が受け入れてくれ、1年間、国語を勉強した。身元保証人が、今の私立大学を推薦してくれた。日本の大学のことはよくわからなかった。地名が大学名についているので国公立かと思っ

ていたら、私立だった。後から考えれば、専門に勉強するとすれば、今の大学のレベルはよくなかった」

そして第4に、専門学校生は、来日後、就学生として日本語学校に1～2年通い、その後、ファッション・ビジネス・インテリア等の専門学校に進学し、留学生となって、現在に至っている。彼らの学校での専門は、来日前の職業とは殆ど無関係である。しかし彼らは、将来の職業生活に役立つと判断した専門を選択しており、その意味ではほぼ希望通りと受けとめている。ただし、一部には、大学受験に失敗したり、学費の都合で希望する専門に進めず、不本意な専門学校に進学した者も見られる。

＊「将来、中国で経営できると思うので、ファッションの専門学校に進学した。私は中国では会計や簿記をやっていたから、その専門学校に行こうかとも考えたが、それは中国に帰ってから、会社に入れないと役に立たない。それでファッションの専門学校に入った。妻はもともと中国で服装の専門店をしていたから、夫婦でそれを経営したいと思って。今、服を作るデザインなどの勉強をしている。もし、きちんと勉強すれば、日本のファッションは世界の先端になっているし、中国はまだこれからだから役立つだろう。今、中国は開放中だから、私は背広や男子服関係の勉強をしている」

「私は、香港に住んでいる伯母の養子になっている。その人が建築会社をやっているの、インテリアデザインの専門学校に進んだ。でも本当は建築関係の大学に進みたかった。受験したが落ちたので、仕方なく専門学校に行っている」

「私の中国での専門は自動車のエンジン。それが今はファッションの専門学校に行っている。ファッションの専門学校は、学費が安いので仕方なく入った。本当は自動車工学の専門学校に行きたかったが、そこは学費が100万円位で高い。勉強したかったけど、とても無理。諦めた。ファッションには全然関心はなかった。だから、今、学校の勉強は全然おもしろくない。将来、それを生かす気もない」

第3項 韓国留学生

さて次に韓国留学生である。彼らの来日後の在留資格・学校・学籍の変遷は、国費・私費を問わず、中国人国費留学生に似ている。即ち彼らは、当初から留学生として来日した。彼らの多くは、来日直後から、現在在籍する大学の日本語コースで約半年間学び、その後、大学院生、又は、それを目指す研究生となった。また大学院では、修士課程終了後、博士課程に進学している。彼らの研究内容は、母国での専攻を継続・発展させたものである。また彼らの一部には、所属講座の研究内容が希望や予想と違い、来日後、研究内容を変えざるを得なかった者もいる。それは、事前の情報不足、及び、政府や所属機関・教授が一方向的に講座所属を決定してしまったためである。

＊「私の出した希望とは、大学も学部も違う。全くわけがわからない。日本の文部省が決めた。私が希望したのは、文学部の東洋史・日本近代史。今、法学部に配属されている。法学部と言われたときはびっくりした。決まった経過が全くわからない。実際に入ってみると、文学部の歴史学科とこの政治史の講座は同じような内容なので問題は少ないが、学位の種類が違うし、大学はやっぱり希望と違う。ちゃんとした理由を説明してほしい。希望通りにしてほしい。みんな秘密・内緒にしている、説明してくれない。どういう先生がどんな大学にいるのか、どういう内容で研究しているのかが、もっと事前にわかっていればスムーズに行くのではない。後輩には、講座の詳しい研究テーマについて、前以てよく調べておくようにアドバイスしたい。漠然と適当な学部・講座に行くのではなく、きちんと最後まで自分で調べた方がいい」(日本政府国費)

「講座は希望と違う。韓国の先生が紹介してくれたのだが、来てみると、もっと自分の専門にふさわしい講座がある。大学を選ぶにしても、大学別のパンフレットが少ない。韓国の大きな大学にパンフレットを送れば、日本にくる人にとって便利だ。留学の案内情報があるけど、日本もかなりひどい国だと思った。日本の留学案内は東京中心で、東京以外に来る人にとっては詳しくない。地方別にできれば詳しい大学情報が必要。どこの大学にどういう専門の先生がいるのか、論文を読んでも連名だとわからない。後輩には、研究内容は講座毎に違う

のだから、自分の研究テーマに合う大学を選択するのが大事だということをアドバイスしたい。私の失敗を繰り返さないために」(私費)

第4項 インドネシア人留学生

最後にインドネシア人留学生である。彼らのうち、母国で既に研究職に就いていた者は、来日直後から、現在所属する大学の講座もしくは日本語コースの研究生となり、その後、大学院に進学している。彼らの専攻は、来日前の専攻を継続・発展させたものだが、しかし、他国の国費留学生と同様、事前の情報不足や政府・教授による一方的決定に基づく専門の齟齬・変更がある。他方、高卒者のインドネシア人留学生は、来日後、日本語学校で就学生として1年間学び、その後、大学に進学している。彼らの専門は未定だが、所属する大学はほぼ彼らの希望通りである。

*「専門は国にいたときと違う。自分のやりたいことと違う。日本の文部省の人と面接して希望を説明したが、違っている。私は、原子炉の安全について研究したかったが、今は原子炉の材料を研究している。インドネシアにいるときにこんな問題がわかっていれば、多分日本には来なかった。来る前は、どの大学に行くのかもわからなかった。A大学に行くということが、日本に行く1週間前にわかっただけ。先生も講座もわからなかった。そういう情報は絶対に必要だ。例えばアメリカの大学の場合は、先生はだれか、講座はどこかということが事前にわかっていた。日本の文部省は官僚的だ。研究テーマや内容は、研究にとって一番大切なことなのに」(大学院生)

第4節 小 括

以上、アジア人留学生・就学生の基本属性と生活史を分析してきた。以下、その特徴を簡単に要約しよう。

第1項 中国人国費留学生

まず、中国人国費留学生の多くは男性で、平均28.2歳である。都市部の専門職共働き家族の子弟が多いが、しかし農村出身者や一般労働者家族の子弟も一定の位置を占める。彼らは中国で、理系の大学院・大学に在学中か、又は、そこを卒業して研究職に就いていた。既婚者が多く、来日前の生活水準は「平均的」であった。

彼らは、もともとアメリカなど日本以外への留学を希望していたが、母国政府・所属機関の決定により、「半ばやむなく」留学先を日本に変更した。彼らの留学の目的・動機は、専門研究の深化と博士の取得に集中している。また「自国の要請」・「祖国への貢献」が留学の動機になっているのも、彼らの特徴である。彼らは、もともと日本への留学を考えていなかったもので、日本語の問題に不安に感じつつ、来日した。

彼らは、当初から留学生資格で来日した。来日後、大学の日本語コースで日本語を学び、半年～1年後に専門の研究科の大学院生、又は、それを目指す研究生となった。彼らの専攻は、基本的には母国でのそれを継続・発展させたものである。しかし、事前の情報交換不足、及び、両国政府による一方的な講座所属決定により、講座と自らの研究内容に一定の齟齬が生じてしまった例も少なくない。

第2項 中国人私費留学生

これに対し、中国人私費留学生は、約30歳と高齢で男女が相半ばしている。都市部の専門職の共働き家族の出身者が多い。自らの生活水準は、「やや高い」と評価している。彼らの母国での学歴・職歴には文化大革命の影響が刻印されている。そして、その後の生活史は、大きく4つのタイプに分け

られる。

まず第1に、現在、国立大学の理系大学院に在籍する私費留学生は、中国で既に理系の大学院・大学を卒業して、研究職に就いていた男性が多い。既婚者と未婚者が相半ばしている。彼らは、もともとアメリカなど日本以外への留学を希望していたが、日本の大学に受入教員を確保したことにより、日本への留学に踏み切った。彼らの留学の目的は、専門研究の深化と博士の取得である。彼らは、日本語の問題に加え、来日後の生活費や学費の不安を感じつつ、来日した。来日後、彼らは、大学の研究生となり、半年～1年後に大学院に進学した。彼らは、来日前から日本の大学教員と情報交換・意志疎通をしているので、講座所属やそこでの研究内容には、特に不満を感じていない。

第2に、現在、国立大学の文系大学院に在籍する私費留学生は、中国で日本語・日本関係の大学を卒業し、日本語の通訳・翻訳として働いていた女性・既婚者が多い。彼らの留学の目的・動機は、一方で、「日本の生活体験」を通して、「日本語の一層の上達」、「日本人の友人作り」、「日本社会の観察」等を果たすことであり、他方で、日本語以外の専門を学んで修士や博士の学位を取ることであった。彼らは、中国での専攻や職業を通し、大学関係者以外の日本人と知り合い、その人を保証人として来日した。来日に伴う不安は、比較的少なかった。ただし彼らは、最初から留学生として来日したとは限らない。もちろん最初から留学生として来日した者もいるが、それ以外に、就学生・中国語講師・留学生の配偶者等々、多様な資格で来日し、一定期間、就労した後、大学院に進学した者も多い。彼らは、大学院で人文社会科学を学んでいるが、現在の専攻に決まるまで、「指導教員に受け入れてもらうため」、又は、「大学院に入りやすそうだから」と、様々な模索・変更を経てきた。ただしそれはあくまで自らの判断による模索・変更であり、彼ら自身はそのことに不満を感じていない。

第3に、私立大学の大学生・研究生の多くは、中国で短大・専門学校を卒業した一般労働者である。男女・既婚未婚はいずれも相半ばしている。彼らは、文化大革命で阻害された専門教育を希望し、同時に中国脱出・他国での生活を望み、知人・友人のツテを頼って日本人の保証人を確保し、それによって来日を実現した。来日後の彼らの経歴は極めて多彩で、就学生・高校交換学生を経て私立大学に入学した者、その過程でいくつかの受験に失敗して一時帰国し、再来日した者、「日本語学校より学費が安いから」と必ずしも進学を前提にしない研究生になった者等々がいる。こうした複雑な経路を反映して、彼らの中には現在の所属大学・講座が「必ずしも希望通りではない」と感じている者もいる。

そして第4に、現在、専門学校で学ぶ私費留学生は、中国で大学を卒業し、専門職に従事していた者が多い。男女は相半ばしているが、未婚者が圧倒的に多いことが特徴的である。彼らは、別に専門的学習のために来日したのではない。むしろ、市民的自由の欠如した中国から脱出し、自らの新たな人生を模索しようと出国したのである。それだけに彼らは、来日に際して莫大な借金をしたり、あるいはそれまでの安定した生活を清算している。彼らにとって、この出国は大きな賭けであった。彼らが出国先として日本を選んだのは、ひとつには、知人・友人を介して日本人の保証人が確保できたこと、そしてもうひとつは日本が「経済大国」であることによる。彼らは、日本の実社会の中で経済や日本語を学び、また貯金すれば、今後の生活設計に資すると思ったのである。彼らの来日に際しての最大の問題は、中国出国・日本入国の資格がとりにくいことであった。これをクリアして来日した彼らは、まず就学生として日本語学校に1～2年通い、その後、将来の生活設計に生かせそうな、しかも来日前の専門とは殆ど無関係な専門を選び、専門学校に進学した。ただし中には、学費や成績の問題で、希望通りの学校に進学できなかった者もいる。

第3項 中国人就学生

中国人就学生は、私費留学生と同様、都市出身者が多く、男女相半ばしている。しかし彼らはやや若く、文化大革命の直接的影響は受けていない。また彼らには、一般労働者家族出身の未婚者が多い。

彼らは、先に来日した兄弟・友人等を介して日本人の保証人を確保し、来日した。

中国人就学生には、大きく2つのタイプがある。

第1は、中国で大学・大学院を卒業し、専門職に就いていた者である。彼らは20歳代後半で、自らの生活水準を「やや高い」と評価している。彼らは、基本的には大学院進学を目指して来日したが、同時に政治的・市民的自由を求めて中国を脱出したという要素も少なくない。彼らは、出入国資格がとれるかどうか最大の不安であったが、これをクリアして来日し、現在、日本語学校に在籍している。

第2は、中国で高校・中専を卒業し、一般労働者として働いていた、20歳代前半の若者である。彼らは、来日前の生活水準を「平均的」・「やや低い」と評価していた。開放政策の中で育った彼らは、「経済大国」・日本で、経済・ビジネスを学び、今後の職業生活に生かしたいと考え、また「漢字の国」・日本なら言葉の問題も少ないだろうと考え、来日した。彼らは、現在、日本語学校に在籍し、大学進学を希望している。

第4項 韓国人留学生

さて、韓国人留学生は、30歳前後の男性が多い。彼らの多くは都市部出身で、父親が管理職・経営者、母親が専業主婦という家族の子弟である。彼らは、韓国で、理系を中心とする大学院を出て、研究職についていた。既婚者が多く、生活水準は比較的高く自己評価している。彼らにとって日本は第一希望の留学先であり、彼らの留学の目的は、専門研究の深化と博士の取得に収斂している。来日に伴う不安は自らの健康である。そして彼らは、来日後、大学の日本語コースで半年間学び、その後、大学院生、又は、それを目指す研究生となり、現在に至っている。彼らの研究内容は、韓国でのそれを発展させたものである。しかし、一部には、事前の情報不足・政府や指導教官の一方的決定のため、希望どおりの専門に進めなかった者もいる。

なお、韓国人留学生には日本政府国費と私費が含まれる。もちろん両者の基本属性や来日の経過には一定の違いがある。しかし、前述の中国人留学生に比べれば、韓国人の場合、国費と私費の間で、それほど大きな差異はない。

第5項 インドネシア人留学生

インドネシア人留学生は男性が多く、農村出身者が一定の位置を占める。彼らの父親は管理職、母親は専業主婦であることが多い。彼らは、もともとアメリカなど日本以外への留学を希望し、日本は漢字の問題を理由にやや敬遠していた。しかし、母国政府・所属機関の決定により、日本政府・インドネシア政府の国費留学生として来日したのである。彼らの留学の主な目的は専門研究の深化である。主な不安は、研究・勉強のことであった。

インドネシア人留学生には、2つのタイプがある。

第1は、インドネシアで理系の大学院や大学を出て、研究職についていた30歳以上の既婚者である。彼らは自らの生活水準を「やや高い」と評価していた。彼らは、来日直後から、大学の講座、又は、日本語コースの研究生となり、その後、大学院に進学している。彼らの専攻は、来日前の専攻を継続・発展させたものだが、しかし、他国の国費留学生と同様、事前の情報不足や政府・教授による一方的決定に基づく専門の齟齬・変更も見られる。

第2は、高校卒業直後、又は、大学在学中の学生である。彼らは21～22歳で未婚、自らの生活水準は「平均的」と評価している。彼らは、来日後、日本語学校に1年間在籍し、その後、ほぼ希望通りの大学に進学している。

第6項 マレーシア人就学生

最後に、中国系マレーシア人就学生は、高卒直後で19歳前後と若く、未婚である。男女は相半ばしている。両親は都市部で自営業を営み、生活水準は「平均的」と評価されている。彼らは、日本の政治・経済に強い関心を抱き、日本の大学で経済・経営を学ぼうと来日した。彼らの不安は多様だが、特に女性を中心に、初めて家族から自立することへの不安が大きかった。いうまでもなく彼らは、来日後、日本語学校に在籍し、今日に至る。

《補 注》

- (1) 私立大学の私費留学生にも大学院卒が2人いる。ただし、1人は、日本国費留学生として来日し、後に私費に転換したものである。他の1人は、大学院で現代中国政治・中国共産党史を専攻し、卒業後、警察学校の教員を3年間やったが、その後、服装製造販売会社の販売管理の仕事に転職している。彼は、「専門が好きでなかった。趣味として研究するのはいいが、それだけで人生をおわるのはつまらないと思った」と語っている。
- (2) 中国人私費留学生には、副業を営む者もいる。彼らが自らの生活水準を「やや高い」と評価する際、副業の位置は見逃せない。「薬品販売会社勤務の他、自分で副業もしている。ひとつは、友人と2人で醤油など食品製造工場を所有・経営している。5人位雇っている。自分は暇なときに管理の仕事をするだけ。これはまだ投資中で収入は大したことはないが、それでも薬品会社の給料より多い。もうひとつは、山の上に土地を借りて、人を雇って、びわ・桃・ミカンなど果物を作っている。将来のことを考えないとだめだよ。福建省は開放中の省だから、こういうこともできる」(男性)。
- (3) ある私立大学私費留学生は、大学入学の問題を次のように語る。「友人が大学を受けるとき、中国では10年教育だったが、ある大学を受けようとしたら、あなたの教育期間は12年に足りないから受験できませんと言われた。それなのに他の大学を受けたら合格した。だいたい大学に入るまでの教育期間が何年かということは、政府が決めたことで、私達の責任ではない。しかも大学によってこんな曖昧な対応がある。これでは混乱になるでしょう」。

第2章 留学生・就学生の学習－労働－生活過程

本章では、留学生・就学生の現時点における学習－労働－生活過程の特質と、そこでの問題の所在を明らかにする。

第1節 研究・学習過程の諸問題

まず、研究・学習過程である。研究・学習過程の特徴と問題は、いうまでもなく、在籍する研究・教育機関によって大きく異なる。そこで、以下、①国立大学大学院（又はそれを目指す研究生）、②私立大学、③専門学校、そして④日本語学校にわけて、見ていこう(表1-5・2-1・2・3参照)。

第1項 国立大学大学院

まず、国立大学の大学院を見る。ここでは、多くの留学生は、机・いす・電気スタンド等を個人専用で使える。それ以外の施設・設備は共同利用である。講義は、一部の集中講義を除いて少なく、ゼミ・実験・論文・学会発表が主な研究・教育方法である。もとより、現実の研究過程・研究条件は、理系と文系で、またさらに細かい専門に応じて、そして博士課程・修士課程・研究生の違いによって、様々に異なる。ただし、同一の専攻・課程・学年の中では、大学院が提供する研究・学習条件には、国籍や国費・私費による差はない。

しかしながら、大学院の留学生が実際に感じている研究・学習上の問題は、専攻・課程・学年の違

いより、むしろ、国籍毎に、また国費・私費で、つまり留学生側の要因により、明確に異なる。

まず中国人留学生について見る。

理系を中心とする中国人国費留学生は、コンピュータや実験機器等、研究施設・設備の不足、及び、それらの利用手続きの繁雑さを、大きな問題と感じている。また彼らは、日本のゼミでは教員に対する遠慮があり、「自由闊達に議論しにくい」ことにも不満を感じている。なお彼らは、来日直後は日本語、特に会話で苦勞した。しかし現在は、「ゆっくり話す」など一定の配慮があれば、研究上、それほど日本語の面では不自由を感じていない¹⁾。以上のような特徴は、中国人国費留学生の中でも、特に中国政府国費留学生に顕著に見られる。

*「温度差のあるクリーンハウスが大学にない。研究室の先生に希望を出したが何も返事がない。10度～30度位温度差があればいいのだが、それがいいのでいい実験ができない。それとゼミでは、皆もっとね、自由に意見とか考え方とか、もっと言いたい放題に、何もこわがらずに、笑われることをこわがらずに話した方がいい。うちの講座の現状は自由に話せない。どうやら日本人の学生は皆そうじゃないかな。自分の考えを率直に伝えるのはよくないという感じがあります。先生に率直に反論するのもよくないという感じ。来日直後は日本語の問題があったが、今は大丈夫。半年かけてだんだんわかった。専門の論文は意味はだいたいわかる」(日本政府国費)

「普段使う実験設備・分析設備が不足している。院生が自由に使えるパソコン計算機センターがほしい。計測関係の設備も足りない。なかなか順番が回ってこない。増やしてほしい。せめて大学にある施設がどこの講座のものでもちゃんと使えればいいのだが。他の講座のものをを使うのは、いろいろ手続きが面倒臭い。ゼミはもっと自由に議論できればいい。いつも先生が最終的に意見を述べる。先生にへたな質問はできないという雰囲気があるから、わからなくてもそのままにしている。もっといいことを率直に言い合えばいい。自分の率直な考えを皆に伝えるにいい感じがあります。来日直後は、日本語の問題で、先生が何を話しているのかわからなくて、半年間位はすごくつらい。今はわかる。特に読むのは専門が漢字が同じだから問題ない」(中国政府国費)

「自分達の調査では、野外で写真をとったり、顕微鏡から写真をとったりする。カメラをもっていないきやだめ。カメラ位個人でももっていてもいいけど、講座でも用意してほしい。もっていない人も仕事しやすいように。写真代も講座から出るときと出ないときがある。また図書館に理系の文献はとても少ないし、各講座の先生が文献を別々にもっていて、管理の仕方が講座毎に違うから、わかりづらい。あと、ゼミは内容が乏しい。自分のやった実験については話せるが、人間関係の問題で自由に話すことができない。先生のことを尊敬しなければならないとか。そういうことは科学にはよくない。講座は、上下関係ではなく、皆の力・発想を集めることが大切。言葉は大丈夫。ゼミは英語でやることも多い。理系だったら日本語より英語の方が大事。それに日本語でも今は大丈夫。言葉の問題は最初の1年だけ。今はだいぶ慣れている」(日本政府国費)

さて、理系大学院の中国人私費留学生は、国費留学生と同様、研究施設・設備の貧困を強く感じている。また彼らは、研究費の不足も切実に感じ、大学・政府に対して奨学金の整備拡充を強く求めている。さらに彼らの日本語能力は、来日直後から国費留学生より低く、現在でも「日常会話ができる程度」、「やさしい文章なら読み書きできる」など低水準にある。そこで彼らの多くが、日本語の問題でゼミが理解しづらいと感じており、日本語教育の充実を希望している。

*「実験器具と研究費が足りない。他の学部の実験施設を使うときは、お金を払わねばならない。これはちょっと高い。授業料の減免と奨学金の整備を希望する。それと日本語の問題がある。来日したときは日本語が全くできなかった。『初めまして』も言えなかった。今も日本語はあまり上手じゃないから、講義やゼミでも論文でも一番の問題は日本語。漢字はわかるけど、書くのも話すのも難しい。研究の言葉はちょっと違うから難しい。学会に参加しても、何を話しているのかわからない。自分の考えでは、中国の留学生はだいたい研究能力はある。中国での外国語は英語だから、ここへきて、日本語と英語の2つというのは、ちょっとつらい」

「研究設備と研究のお金が不足している。新しい設備で実験するともっと便利だが、講座のお金が少なくて揃

自分ではわかるもの施設・設備の問題 講義の問題 セミの問題 研究・論文指導が理解できない原因大学・政府への要望

[illegible]

(注) 目分費用につかえるもの：A=机いす、B=研究費、C=バウプロ、D=ワープロ、E=電話。
理解困難な理由：a=日本語、i=興味不足、u=その他、学合：a=参加学会数、b=発表学会数、c=学会発表回数
大学・政府への要望：i=奨学金整備、ロ=教育充実に、a=受入拡大
実態調査より作成。プレイバシー保護のため、ロ=NOは表裏に一不統一。

イロ米目直後○、現在◎

[illegible]

会話	読み書き	イロハ
A・B・C・D・E	a・b・c・d・e	

Figure 1 is a 10x10 grid illustrating the distribution of Japanese characters used in the Japanese Language Proficiency Test (JLPT) N1 exam. The grid is divided into four quadrants by a vertical line at column 5 and a horizontal line at row 5. The columns are labeled with Roman numerals I through X at the top. The rows are labeled with Roman numerals I through X on the left. The characters are represented by circles (○) and triangles (△). The distribution shows a higher density of characters in the top-left quadrant (I-V, I-V) and a lower density in the bottom-right quadrant (VI-X, VI-X).

挨きて、が書小説　仕れ
 Bで理解を促すから。う
 Xが理とときかな文書生ハ選択一保護のた
 い会始終第二章のイ、
 念前にはかみ文庫章ロ振を不統
 日語オ読タじ印文　選簿ニ
 かものジとカシ師をラ無
 わC人リ・ま新進連理の左
 と本・となや一程通問語は
 ど度日じほか＝d本本の成
 得＝レ＝v＝c　新日語イ
 はるDテア＝ひるるの本にリよス
 Aで度ヒききて　日こ調ヶ
 が移るふいき書めし事し應の
 公話せるい書き書めし事し應の
 読　　イ　　実

えられない。基本的なものも殆どない。あー、実験したいと思っても、金がかかるので止めることがよくある。金がなくても実験はできるけど、かなり限定される。とにかくお金が足りない。日本政府は、研究費と奨学金を何とか増額してほしい。それと、留学生にとっては言葉が問題。日本語を勉強したのは来日後初めてだから。書いたものも先生にもう一度直してもらわなければならない。ゼミは日本語がわからないので聞いているだけ。英語のゼミをやる方がいい」

これらに対し、文系大学院の中国人私費留学生では、研究施設・設備や研究費に関する不満は少ない。また彼らは、来日直後から、日本語の問題も殆どない。彼らは、中国にはなかった学習形式としてゼミを積極的に評価している。ただし彼らは、教員の一方的講義、ゼミの時間、文系で博士が取りにくいこと等に不満を感じている。また彼らは、奨学金の拡充、及び、留学生の日本語水準を確保するための厳格な日本語試験の整備を求めている²⁾。

*「文系だから特別な設備はいらない。設備面ではわりといいと思う。ゼミもいい。中国ではゼミという形式はなかった。こっちに来て初めて。講義は先生のいうことをそのまま聞くだけだけど、ゼミは学生が自分の頭を使って何かを絞り出す。そういう努力は勉強の役に立つ。大学への要望は特にない。いろいろやってくれているので、文句を言うわけにはいかない。ただ日本の場合、文系では博士がなかなか取れない。少しがっかりした。それと日本語能力の検定は何もなかった。研究生で入ってきて、日本語がわからない人で、そのまま大学院に入る人もいる。ある程度の日本語能力は必要ではないか。講義に出てわからない人もいる。日本語の基準をもっとはっきりすべき。国立大学なのだから、そこで2～3年勉強しても、日本語を話せないようなら、大学の名誉にもかかわる」

「施設・設備には特に問題はない。ゼミという形は中国ではなかったが、初めてこういうものに触れて、大変いいと思う。ゼミをしたり、レポートを書かせたり、日本は積極的に自分の頭でアイデアを出させる。中国はペーパーテストの暗記中心。ただ、みんなに奨学金を与えるようにしてほしい。それと、留学生を受け入れる前に日本語の能力試験を取り入れるべき。それがないと簡単に来てしまっただけで就労の問題が出てくる。日本語がわからないと、大学で勉強といってもできないはずだが、そうじゃない人もかなり入ってきている。講義の内容としては、先生と学生があまり話し合っていない。先生の一方的な準備じゃないか。学生がどれだけ理解できているか、あまり考えていないし、学生も積極的に臨んでいない。ゼミの時間が長すぎて十分に効果があがっているか疑問。場合によっては3～4時間も続く。頭が疲れて集中できない」

「うちのゼミは厳しいけどおもしろい。先生はズバリ言う。はっきり言う。その方が助かる。勉強になる。論文指導も問題はない。先生は『外国人扱いしませんよ』とはっきり言った。講義は先生によって違うが、思う通りに言うだけで、つまらない先生もいる。日本の大学の先生は、教師というより、研究者。講義のうまい下手は関係ない。教え方の工夫が足りない。もっと聞きたいと思うような講義をしてほしい。それと日本語教育・入試の問題がある。日本語が全然できない人が来ている。アメリカのTOEFLのように、何点以下は来てはいけないとか、はっきりシステム化してくれた方がいい。そうでないなら、試験を受ける、講義がわかる位の日本語を短期間でマスターできるようなシステム・基金等を作らないといけない」

以上、大学院、又は、それを目指す研究生の中国人留学生の学習・研究上の問題をみてきたが、彼ら中国人留学生には、共通して感じているもう一つの問題がある。それは、日本の大学では、大学院生が一方で「学生」と扱われ、他方で「一人前の研究者」と扱われることについての葛藤である。中国の大学は「あくまで教育機関」とされ、院生も「学生」と扱われる。そこで、国費・私費、理系・文系の違いを問わず、中国人留学生の多くが、一方で「一人前の研究者」と扱われることを求めつつも、他方でもっときめ細かい指導を求めている。こうした葛藤は、中国人以外の留学生にはそれほど見られない。

*「学生扱い」に対する不満の事例としては、「集中講義に出席しなければならない。もう勉強した、何度も聞いた同じことをやっている。そういうことは意味がない。それより自分で研究・実験した方がいい。だからあまり出席していない。論文指導は別に問題はない。自分と先生のやっていることは違うから、あまり指導ということはない。たまに話して、こういう考えがあるという程度で十分」(日本政府国費)、「自分の考えたテーマではなく、先生が与えたテーマを生徒としてやっている。自分の考えの特性が出せない。大学院なのだから、もっと講義は少なくして学生中心にやった方がいい」(理系私費)等がある。逆に「一人前の研究者扱い」に対する不安・不満の事例としては、「中国の大学はあくまで教育機関だが、日本では博士課程は独立の研究者とみなされている。あまり口だししない。でも論文を書く前に、その内容について話をしてほしいし、適切な日本語に直してほしい。ゼミにも、試験やレポート提出を義務づけるべき。それがいいから、みんなあまり真剣に取り組まない」(中国政府国費)、「どのように研究するか、中国にいた頃は学生だから、自分で考えることはあまりなかった。先生に言われたことをやっていた。こっちに来たら1人だから、最初は大変だった。中国の先生の方が指導は親切。日本の先生の指導は具体的でない」(中国政府国費)、「研究の可能性とか意義、方法についてもっと指導する方がいい。日本の先生は学生に任せ過ぎで、指導が少ない」(理系私費)等がある。また両方の中で葛藤している事例として、「私の指導教官は、最初から研究者として独立しなさいと言う。もちろんアドバイス・参考文献の紹介はあるが、独立して勉強する人と認めてくれる。しかし留学生は本国のシステムと違うし、図書館も違うし、文革もあったし、勉強の方法が、図書館の利用の仕方とか、テーマ・資料の集め方とか、学生時代にすむことがすんでいない。だから、そこを教えてくれたら、大回りしなくてもいいと思う。私は研究の方法でとても悩んでいる。時間がとてもかかる。大回りになる。とても親切な先生もいるが、子供扱いだったら、一人の学者として立てない。だから今の方法が一番よかったとは思っている」(文系私費)等がある。

さて、韓国人留学生では、研究施設・設備、研究費に対する不満は存在するが、しかし「母国よりまし」との比較により、それほど顕在化していない。むしろ韓国人留学生では、ゼミや論文作成における日本語の問題がより多く指摘されている。特に韓国人の私費留学生の日本語水準は、中国人の理系の私費留学生とほぼ同水準で、十分とはいえない。さらに韓国人留学生では、「受け入れ基準が曖昧で安易すぎる」、「教員が多忙で指導が不十分」、「留学生の特別扱い」、「教員と留学生の馴れ合い」、「教員による指導のずれ」等、日本の大学の留学生受入体制の不備、及び、それに基づく受入教員の現場レベルでの対応に不十分さを感じている者が多い。

*「研究では、日本語が一番の問題。ゼミでは英文を訳して発表するが、初めのうちは、英語からハングルにして、それから日本語。2～3倍の労力がかかった。文法を体系的にやっていなかったの、苦勞した。留学生は、研究内容と日本語の二重の問題がある。文章はまだわかるが、ゼミでは話を聞いて議論しなければならないので難しい。頭の中でわかっていても、それを実際に話すのは難しい。日本語にしているうちに話題が移ってしまう。アメリカへの留学なら、中学・高校と英語を習うから簡単。日本にくる留学生は、個人的に少し勉強するだけ。日本語は英語より難しい。韓国には日本語の先生は少ない。日本政府は、言葉の普及のために、日本人を派遣すべき。アメリカは英語の普及のために韓国の高校に人を派遣している。図書館やコンピューター等の施設は講座のものをを使うから、あまり改善すべきとか考えたことはない。ただ日本の先生は忙しすぎて学生の指導ができない。先生も自分の研究があるから、学生の指導まで手が回らない。留学生を受け入れたら特に大変だと思う。その意味では先生の努力には感心し、指導にも満足しているが、しかし大学の先生は仕事が多すぎて、人数が足りない。もっと先生を増やすべき」(私費)

「言葉の問題がある。講義やゼミは50～60%位わかる。論文執筆は細かい日本語表現が難しく、少し大変。施設・設備については、100%満足ではないが、韓国に比べるといいので不満はない。多少問題があっても、向こうに比べると問題にならない。それより、大学の先生一人一人の考え方に問題がある。中には、『留学生受け入れは面倒』と考えている先生もいるようだ。そういう意識が問題だ。欧米の留学生は受け入れるけど、アジアの

人達は遅れているからよく見ない先生もいる。先生によっても違うが、良い意味でも悪い意味でも日本人学生と留学生と差をつけない方がいい。特別扱いされるのはいいけど、一緒に勉強してるわけだから。国では留学生を受け入れようという政策・国際化の動きがあるようだが、国のことより現場が問題。先生方の考え方が国際化されなければ、日本の国際化は実現できない。留学生の数は増えるかも知れないが、内部でいろんな問題が出てくる」(日本政府国費)

「自分の専門に直接関係のある分野は言葉も60～70%わかるが、専門以外だとわかりにくい。50%以下。自分の専門でない分野の専門用語についての知識が足りない。発表するときも自分では難しい。日本語がネック。書くのも苦勞する。簡単なレポート1枚書くのに4時間かかる。それでも半分位間違っている。それに私費だから、自分でいろいろ奨学金や学費免除の申請手続きをしなければならないが、その時も掲示の日本語がわからなかったり、面倒で見忘れたりする。研究施設・設備については、韓国より日本の方がいい。比べものにならない。不満はない。ただ、例えば中国人留学生等でお金がなくて困っている人、働いている人がいる。それはビザを取るとき、お金のない人でも簡単に取れるからだろう。中国人のように働いている人は忙しくて勉強が難しい。ビザをあげるとき、あらかじめ1年の勉強にはこれだけのお金が必要だと知らせればいい。最近、先生が留学生受け入れを甘く見ているのではないかと思う。先生個人には満足しているが、適当にやれば何とかなるといふ雰囲気がある。このままで行くと、ズルズルといってお互いに苦しい立場になる。人間関係だけで、勉強できる条件のない人を受け入れるのはよくないんじゃないか。実際、アメリカではある資格がないと受け入れられないというはっきりした基準がある」(私費)

最後にインドネシア人留学生では、研究施設・設備の貧困さ、及び、日本語の問題が指摘されている。特に日本語については、中国・韓国の留学生と違い、漢字のハンディが大きい。彼らの多くが、日本語の問題で講義・ゼミが理解しづらいと感じ、またそれを補完するために英語の文献・教材の整備を求めている。

*「日本語の勉強が負担。最初は何もわからない。今は半分位理解できる。でも、研究にとって、日本語のゼミや講義は負担になる。漢字を早く書かれるとわからない。わからない時は家に帰って調べ直したり、英語の本で予習したり、質問に行ったりする。論文は英語で書くので問題はない。研究所みたいな所で、研究に専念できたらいいと思う。後輩には英語の文献をもってきた方がいいとアドバイスした。大きな本屋にも大学にも英語の本は少ない。大学生協で英語の本を注文したら3カ月かかると言われた。こんなこともあった。朝、集中講義に出てみると先生がこない。3人の留学生だけがその部屋にいる。日本人の学生はひとりも来ない。改めて掲示をみたら休講だとわかった。掲示が日本語ばかりでわからなかった。悲惨だ。今、読めるのは20～30%。書ける漢字は600字位。それと問題は、カメラやパソコン、駐車場などの施設設備が足りない。私はフィールドに出ることが多いから、車がないと勉強にならない。でも大学では車もないので自分で中古を買った。大学の駐車場も足りない。それと、パソコンがNECばかりで、IBMとの互換性がない。初めから使い方を勉強しなすなければならない。いろんな国から留学生が来ているのだから、IBM位入れればいいのに。カメラ・パソコンも講座に4台しかない。みんな使いたいので、データが多くてすごく混んでいる。夜まで大学にいないと順番が回ってこない」

第2項 国立・私立大学

さて次に、国立・私立の大学について見る。大学の学生・研究生には、個人専用の机も共同研究室もない。彼らは、図書館や食堂で勉強している。客観的な学習条件は、大学院生に比べ、かなり劣悪である。

ここでは、私立大学の中国人私費留学生、及び、国立大学のインドネシア人国費留学生の問題を見ていこう。

まず、私立大学の中国人私費留学生である。彼らの多くは、主に日本語の問題で講義が十分に理解できないと感じている。確かに私費留学生のうち研究生には、日本語能力が極めて低く、講義に耐えられない者もいる。しかし、大学生の私費留学生の日本語能力は、多くの場合、前述の大学院の中国人留学生よりむしろ高い。それにも関わらず、彼らが日本語の障害を強く感じるのは、大学生の場合、大学院と異なり、講義数が多く、しかもその多くが多人数を対象としたマスプロ授業であることによると思われる。ただ彼ら自身は、こうした講義形式の問題としては捉えず、自らの日本語能力の不十分さに問題があると考え、「講義の資料がほしい」等の改善策を求めている。また彼らの多くは奨学金制度の拡充を求め、一部は「図書館しか勉強する場所がないので開館時間を延長してほしい」等、客観的な学習施設・設備の改善を望んでいる。

*「1人1人の机がないので、図書館で勉強するしかない。満員なら食堂でやる。教室は、授業が始まると追い出されるから。一番の問題は、日本語の理解。講義のとき、プリント・資料がほしい。聞いてもわからない所がときどきあるから。特に専門用語が難しい」

他方、国立大学で学ぶインドネシア人国費留学生では、日本語の問題が最も深刻である。彼らの多くが、日本語の問題で講義やゼミが理解しづらいと感じている。特に彼らは、中国人や韓国人に比べ、漢字のハンディが大きい。そこで、中国人や韓国人では比較的容易な「読む」ことが、彼らには最も難しい。そこで、彼らの多くが、これを補完するために英語文献・教材の整備を求めている。また日本語の負担とも関連して、講義数が多い彼らは、「専門外の講義が多すぎる」、「母国で習っていない分野の勉強が難しい」等を大きな問題として感じている。

*「日本語が一番の問題で、勉強についていけない。日本人の学生は、授業中、質問しないので、質問すると何か恥ずかしい感じがしてできない。試験やレポートでも、日本語の問題がある。漢字が特に難しい。先生の板書はいねいじゃない。読みにくいし、早くしゃべる。物理と化学はわかる。社会学・人類学・経済学の漢字は難しい。文系科目は負担だ。単位が多すぎる。レポートを書くのも大変だし、本を読むのも1回ではわかりづらい。講義は週に17コマもあって、日本人だったらサボったりできるが、自分はわからないことがあるから一生懸命に出席している。図書館に英語の本をもっと増やしてほしい。それに英語の表示がないから、本の検索が難しい。あと、数Ⅱが、日本にきて初めてやる分野だから理解しにくい。もっと数学の練習の時間がほしい。日本は思ったより数学のレベルが高いので、向こうでもっと深く勉強しておけばよかった」

第3項 専門学校

さて次に、専門学校の中国人私費留学生である。ここでは、大学院・大学より一層深刻な問題が発生している。即ち、「学校が定員オーバーでビザが認められない」³⁾、「教師の能力・責任感に問題がある」等、留学生が学ぶ学校として最低限の水準すら満たしていない事例が少なくないのである。もちろん専門学校の施設・設備は客観的には、大学院や大学に比べ、劣悪である。奨学金も殆どない。しかし、留学生にとっては、それ以前に定員オーバー⁴⁾や教師の資質が深刻な問題であり、施設・設備や奨学金の改善にまで要求が及んでいない。なお彼らの日本語能力は、来日直後は非常に低かったが、現在では、学習上、それほど問題がない水準に達している。

*「このビジネス英語の専門学校はよくなかった。去年、専門学校にお金を払い込んで、出席率98%なのに、学校が定員オーバーなので、ビザ延長が許可されない。不安な状態だ。こういうことは、私たちの学校だけではなく、たくさんある。2～3年前だったら、申請中の判子押されたら、大変だ、とびっくりしたが、今は、あの人も申請中か、と当たり前になっている。それに、うちの学校の教師は、あまり英語が上手ではない。現実に基づいていない。実際に使われないことを言う。実用性がない。日本人の先生は英語の発音も駄目。はじめは外国人教師がもっと多かったが、うちの学校は問題が多いのでだんだんやめて、今は日本人と外国人が半々になっている。」

しかも人手不足で、先生が病気のときには授業ができない」

「ビジネス英語の専門学校だが、先生が無責任。先生によって違うけど、悪い先生もいる。学生に不満をもったら、授業をやらないで休みにしてしまう先生もいる。もし、学生が何か意見を言ったら、それが悪いことでなくても、先生はなかなか許さない。『そんなに文句を言うんだったら、授業受けないでいいです。家に帰って下さい』という。そして、『どちらでもいいけど、出席が足りないと、ビザがとれないよ』と脅かす。学生と先生と、そういうことでよく喧嘩になる。今の学校には、学生はだまされた。入学する前に『留学生ビザできますか』と確認したら、『できる』と言われた。4月に入学して、5月に入管に行くと、『まだ申請中だ』と言われた。理由は、外国人と日本人の学生の比率、外国人が多すぎるとのことだった。でも、これは、学生の責任ではない。学校の責任だ。私たちはみんなだまされたのです。もし、問題があるのなら、私たちを取り締まるのではなく、学校の方を取り締まってほしい。私たちは60万円位授業料を払ったのに、まだビザがとれない。学生にお金を返してくれるならいいが、それもしない。学生にしたら、1年間の授業料払ったのに、ビザ取れないですごく不満をもっている。入管の人は、あなたの学校はよくないです、と私に言う。でも、それは学校の原因です。どうして留学生にビザ出さないのか。私たちの問題ではない。学校に交渉すべきだ。授業料・入学金・2年分の本代など、返却もしない。だからみんな悩んでいる。私も困っている」

第4項 日本語学校

最後に日本語学校である。ここでは、中国人と中国系マレーシア人の就学生が対象となる。

本稿の事例では、両国の就学生とも、特に深刻な問題は見られなかった。もちろん来日後、日の浅い彼らの日本語能力はまだ未熟で、彼らは日本語の学習に難しさを感じている。また将来の進学に不安を抱いている。しかし、現時点では、日本語の学習・上達は、彼らにとって喜びであり、また日本語学校自体の問題点は特に指摘されていない。

ただし、現在の中国人専門学校生の中には、就学生時代、日本語学校の倒産に遭遇した者がいる。またかつて学んだ日本語学校に大きな不満を感じている者も見られる。さらに中国人就学生の中にも、かつて別の日本語学校での就学を希望したが、学校に問題があって許可されず、今回2度目の申請で許可された者もいる。マレーシア人には、そうした問題は見られない。

*「日本の学校には問題が多い。日本語学校のとて、いろいろもめた。この日本語学校の校長は台湾人だったが、台湾人が日本語学校を開くのはだめということで、入管が就学生ビザをくれなくて、経営者が日本人にかわった。これで大丈夫かなと思っていたら、こども廃止になった。この学校の分校は上海にあるが、日本の本校が廃止されて、上海の分校が一番困っているという話だ。とにかく、卒業できるかどうか、心配した」(専門学校生)

「日本語学校はひどい学校だった。教師は、ほとんどパートの主婦みたいな人で、日本語教育の訓練も何も受けていない。質問しても答えられない先生が多い。その先生が、午前中4時間、連続で授業する。学校は、安上がりで雇える先生しか雇わない。それでその学校に入った就学生は、最初は日本語を勉強しようと思っていても、しばらくたつと、ここには進学は無理だということがわかってくる。形だけ授業をやって、進路相談をやるが、内容は全くない。だから学生は、もう進学は無理だと思って、金儲けだけになる。また学校に対して怒って、先生に反抗する。教室では毎日、先生と学生が喧嘩になる。それで先生は半年で10人以上替わった。この日本語学校の学長は、元暴力団員で、指がない。美人の女性の学生は、いろんなパーティに同伴したりして、面倒を見るが、その他の学生が文句を言うと、『それなら(学校を)やめて帰国しろ』と脅かす」(専門学校生)

「以前、だめな日本語学校だったので、日本政府が許可しなかった。手続きまでだいぶお金がかかったのに、全部パーになった。今はいい学校なので、2度目の申請で許可された」(就学生)

《補 注》

- (1) なお中国人国費留学生でも一部に日本語の問題を感じている事例はある。「日本語の問題。ゼミがわかりづら

い。その場で皆に少し迷惑をかけているかも知れない。ゆっくり話したり、その場で留学生に質問させたりするようにしないと、自分から参加しづらいから。そうじゃないとほとんどわからない。レポートを書くのも、そんなに正確じゃない。来日前、日本語を勉強したけれども、本で勉強しても役に立たない。向こうで会話をもっとやればよかった。大学はもっと日本語の勉強の援助をしてほしい。勉強とか研究はどこの国でも苦労しなきゃならない。やはり留学生として不便なのは言葉の問題。それを乗り越えるのが必要。よそから助けてくれないと留学生は大変だ」、「講義では言葉をゆっくり話してほしい。ゼミでも最初はゆっくり話してくれたが、後は早すぎる。自分の専門だとわかるが、そうでないものは半分位しかわからない。ヒアリングがまだだめだから」。

(2) その他、国立大学の官僚制の問題を指摘する意見として下記がある。「最初は別の学部に入る予定だったが、その学部の教務に行くと、いろいろややこしい。中国の大学は、成績証明書や卒業証明書を再発行しない。原本を教務に提出しなければならない。でも、これをなくしたら大変なので、コピーして下さいと頼んだ。コピーして、中国の大学に送って赤印を押して送ってもらった。しかし、駄目だった。『前例がない』と断られた。他学部はコピーでもOKなのに、この学部だけがだめ。こういうことは変えなければならない」。

(3) 同じ専門学校でもすべての留学生にビザ延長が認められなかったわけではない。「学生の中でも一部の人はビザをもらった。それは保証人が全額生活費を出してくれると書類に書いた人。私の場合、ビザ申請のときに法律の規定通り、24時間働いて足りないときに保証人の援助をいただきますと書いたら、許可が降りなかった。保証人の援助だけでやりますと書いた人はOK。保証人と一緒にもう一度入国管理局に行って、もしそういうことで駄目なら、保証人が『私が全額出すから』と言って、書類を書いてくれて、それで受け入れられ、現在、再度、申請中ということになった。入国管理局の人は、あなたの学校は多くの学生が留学生・外国人だからよくないと言った。でもそれは私の責任ではない」

(4) もちろんすべての専門学校にこうした問題があるわけではない。インテリアの専門学校に通う中国人留学生は次のように語る。「学校に入ったばかりだが、悪い面は見たことがない。いい学校だと思う。1クラス56人で、中国人が12人位、バングラデシュ人4人、残りが日本人。私の学校は規則が厳しい、いい学校。出席をとって、名前を呼ばれる前に行かないと、遅刻扱い。2回遅刻すると欠席になる。ちょっとでも遅れると遅刻になる。これはいいことと思う」。

